

サガレンと八月

宮沢賢治

青空文庫

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、何かしらべに来たの。」

西の山地から吹いて来たまだ少しつめたい風が私の見すぼらしい黄いろの上着をばたばたかすめながら何べんも通って行きました。

「おれは内地の農林学校の助手だよ、だから標本を集めに来たんだい。」私はだんだん雲の消えて青ぞらの出て来る空を見ながら、威張ってそう云いましたらもうその風は海の青い暗い波の上に行っていていまの返事も聞かないようあとからあとから別の風が来て勝手に叫んで行きました。

「何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの、しらべに来たの、何かしらべに来たの。」もう相手にならないと思ひながら私はだまつて海の方を見ていましたら風は親切にまた叫ぶのでした。

「何してるの、何を考へてるの、何か見ているの、何かしらべに来たの。」私はそこでどうとうまた言つてしまいました。

「そんなにどんどん行つちまわらないでせつかくひとへ物を訊いたらしばらく返事を待つていたらいいじゃないか。」けれどもそれもまた風がみんな一語ずつ切れ切れに持つて行つてしまいました。もうほんとうにだめなやつだ、はなしにもなんにもなつたもんじやない、と私がふいつと歩き出そうとしたときでした。向うの海が孔雀石いろと暗い藍いろと縞になつてゐるその堺のあたりで

どうもすきとおった風どもが波のために少しゆれながらぐるっと集つて私からとつて行つたきれぎれの語を丁度ぼろぼろになつた地図を組み合せる時のように息をこらしてじつと見つめながらいろいろにはぎ合せているのをちらつと私は見ました。

また私はそこから風どもが送つてよこした安心のような気持ちも感じて受け取りました。そしたら丁度あしもとの砂に小さな白い貝殻に円い小さな孔があいて落ちているのを見ました。つめたがいにやられたのだな朝からこんない標本がとれるならひるすぎは十字狐だつてとれるにちがいないと私は思いながらそれを拾つて雑嚢に入れたのでした。そしたら俄かに波の音が強くなつてそれは斯う云つたように聞こえました。「貝殻な

んぞ何にするんだ。そんな小さな貝殻なんど何にするんだ、何にするんだ。」

「おれは学校の助手じよしゆだからさ。」私はついまたつりこまれてどなりました。するとすぐ私の足もとから引いて行つた潮水しおみずはまた巻まき返かえして波になつてさつとしぶきをあげながらまた叫さけびました。「何にするんだ、何にするんだ、貝殻かいがらなんぞ何にするんだ。」私はむつととしてしまいました。

「あんまり訳わけがわからないな、ものと云いうものはそんなに何でもかでも何かにしなけあいけないもんじやないんだよ。そんなことおれよりおまえたちがもつとよくわかつてそうなもんじやないか。」

すると波はすこしたじろいだようにからつぽな音をたててからぶつぶつつぶや呟くように答えました。「おれはまた、おまえたちならきつと何かにしなけあ済すまないものと思つてたんだ。」

私はどきつとして顔を赤くしてあたりを見まわしました。

ほんとうにその返事へんじは謙遜けんそんな申し訳わけけのような調子ちようしでした

けれども私はまるで立つても居いてもいられないように思いました。

そしてそれつきり浪なみはもう別のことばで何べんも巻まいて来ては砂すなをたててさびしく濁にごり、砂すなを滑なめらかな鏡かがみのようにして引いて行つては一きれの海かい藻そうをただよわせたのです。

そして、ほんとうに、こんなオホーツク海のなぎさに座すわつて乾かわいて飛とんで来る砂すなやはまなすのいい匂においを送おくつて来る風のきれぎれ

のものがたりを聴きいているとほんとうに不思議ふしぎな気持きもちがするのでした。それも風が私にはなしたのか私が風にはなしたのかあとはもうさつぱりわかりません。またそれらはなしが金字あつの厚あつい何冊さつもの百科辞典ひやかかじてんにあるようなしつかりしたつかまえどこのあるものかそれとも風や波なみといっしょに次つぎから次つぎと移うつって消きえて行くものかそれも私にはわかりません。ただそこから風や草穂くさほのいい性質せいしつがあなたがたのころにうつって見えるならどんなにうれしいかしれません。

*

タネリが指ゆびをくわいてはだしで小屋こやを出たときタネリのおつかさんは前の草かはらで乾かわかした鮭さけの皮かわを継つぎ合あわせて上着うわぎをこさえていたのです。「おれ海へ行つて孔あな石いしをひろつて来るよ。」とタネリが云いいましたらおつかさんは太い縫ぬい糸いとを齒はでぷつと切つてそのきれはしをぺつと吐はいて云いました。

「ひとりで浜はまへ行つてもいいけれど、あすこにはくらげがたくさん落おちている。寒かん天てんみたいなすきとおしてそれも見えるようなものがたくさん落おちているからそれをひろつてはいけないよ。それからそれで物ものをすかして見てはいけないよ。おまえの眼めは悪いものを見ないようにすつかりはらつてあるんだから。くらげはそれを消けすから。おまえの兄あさんもいつかひどい眼めにあつたから。」

「そんなものおれとらない。」タネリは云いながら黒く熟したこ
けももの間の小さなみちを砂はまに下りて来ました。波がちよう
ど減ひいたとこでしたから磨みがかれたきれいな石は一列いちれつにならんで
いました。「こんならもう穴あな石いしはいくらでもある。それよりあ
のおつ母かあの云ったおかしなものを見てやろう。」タネリはにがに
が笑わらいながらはだしでそのぬれた砂をふんで行きました。すると、
ちやんとあつたのです。砂のひとこが円まるくぼととぬれたように
見えてそこに指ゆびをあててみますとにくにく寒天のようなつめたい
ものでした。そして何だか指がしびれたようでした。びっくりし
てタネリは指を引つ込こめましたけれども、どうももうそれをつま
みあげてみたくてたまらなくなりました。拾ひろつてしまひさえしな

ければいいだろうと思つてそれをすばやくつまみ上げましたら砂がすこしついて来ました。砂をあらつてやろうと思つてタネリは潮水の来るとこまで下りて行つて待つていました。間もなく浪がどぼんと鳴つてそれからすうつと白い泡をひろげながら潮水がやつて来ました。タネリはすばやくそれを洗いましたらほんとうにきれいな硝子のようになつて日に光りました。タネリはまたおつかさんのことばを思い出してもう棄ててしまおうとしてあたりを見まわしましたら南の岬はいちめんうすい紫いろのやなぎらんの花でちよつと燃えているように見えその向うにはとど松の黒い緑がきれいに綴られて何とも云えず立派でした。あんなきれいなところをこのめがねですかして見たらほんとうにもうどんなに不思議

議ぎに見えるだろうと思ひますとタネリはもう居いてもたつてもいられなくなりしました。思わずくらげをぷらんと手でぶら下げてそつちをすかして見ましたらさあどうでしょう、いままでの明るい青いそらががらんとしたまつくらな穴あなのようなものに変かわつてしまつてその底そこで黄いろな火がどんだん燃もえているようでした。さあ大た変へんと思つてタネリが急いそいで眼めをはなしましたがもうそのときはいけませんでした。そらがすつかり赤味あかみを帯おびた鉛なまりいろに変かわつてい海の水はまるで鏡かがみのように気味きみわるくしずまりました。

おまけに水平線すいへいせんの上のむくむくした雲むくの向むこうから鉛いいろの空のこつちから口かみのむくれた三足びきの大きな白犬よこに横よこつちよにまたがつて黄いろの髪かみをばさばささせ大きな口をあけたり立てたりし歯は

をがちがち鳴らす恐ろしいばけものがだんだんせり出して昇つて来ました。もうタネリは小さくなって恐れ入つていましたらそらはすっかり明るくなりそのギリヤークの犬神いぬがみは水平線まですっかりせり出し間もなく海に犬の足がちらちら映りながらこつちの方へやつて来たのです。

「おつかさん、おつかさん。おつかさん。」タネリは陸りくの方へ遁にげながら一生けん命めいごけ叫びました。すると犬神はまるでこわい顔をして口をぱくぱくうごかしました。もうまるでタネリは食われてしまったように思つたのです。「小僧こぞう、来い。いまおれのところちようざめの家げなんに下男げなんがなくて困こまつているとこだ。ごち走そしてやるから来い。」云いつたかと思うとタネリはもうしつかり犬神いぬがみに

りようあし
両 足をつかまれてちよぼんと立ち、陸地りくちはずんずんうしろの

方へ行つてしまつて自分は青いくらい波なみの上を走つて行くのでした。その遠とほざかつて行く陸地りくちに小さな人の影かげが五つ六つうごき一人は両手を高くあげてまるで氣違きちがいのように叫さけびながら渚なぎさをかけまわっているのです。

「おつかさん。もうさよなら。」タネリも高く叫さけびました。すると犬神はぎゅつとタネリの足を強く握にぎつて「ほざくな小僧、いるかの子がびつくりしてるじゃないか。」と云つたかと思うとぽつとあたりが青ぐらくなりしました。「ああおいらはもういるかの子なんぞの機嫌きげんを考えなければならぬようになったのか。」タネリはほんとうに涙なみだをこぼしました。

そのときいきなりタネリは犬神の手から砂へ投げつけられました。肩をひどく打つてタネリが起きあがって見ましたらそこはもう海の底で上の方は青く明くただ一とお日さまのあるところらしく白くぼんやり光っていました。

「おい、ちようぎめ、いいものをやるぞ。出て来い。」犬神は一つの穴に向つて叫びました。

タネリは小さくなつてしやがんでいました。気がついて見るとほんとうにタネリは大きな一ぴきの蟹に變つていたので。それは自分の両手をひろげて見ると、側に八本になつて延びることでわかりました。「ああなさけない。おつかさんの云うことを聞かないもんだからとうとうこんなことになつてしまった。」

タネリは辛い塩水の中でぼろぼろ涙をこぼしました。犬神はおかしそうに口をまげてにやにや笑つてまた云いました。「ちようぎめ、どうしたい。」するとごほごほいやなせきをする音がしてそれから「どうもきのこにあてられてね。」ととても苦しそうな声がしました。「そうか。そいつは気の毒だ。実はね、おまえのところに下男がなかつたもんだから今日一人見附けて来てやったんだ。蟹にしておいたがね、ぴしぴし遠慮なく使うがいい。おい。きさまこの穴にはいつて行け。」タネリはこわくてもうぶるぶるふるえながらそのまっ暗な孔の中へはい込んで行きましたら、ほんとうに情けないと思ひながらはい込んで行きましたら犬神はうしろから砂を吹きつけて追い込むようにしました。にわかにな

らんと明るくなりました。そこは広い室であかりもつき砂がきれいにならされていましたがその上にそれはもうとても恐ろしいちようざめが鉢巻はちまきをして寝ていました。（こいつのつらはまるで黒と白の棘とげだらけだ。こんなやつに使つかわれるなんて、使つかわれるなんてほんとうにこわい。）タネリはぶるぶるしながら入口にとまっていた。するとちようざめがううと一つうなりました。タネリはどきつとしてはねあがろうとしたくらいです。「うう、お前まへかい、今度こんどの下男は。おれはいま病びょうき気でね、どうも苦くるしくていけないんだ。（以下原稿空白）

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

サガレンと八月

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>